

興福寺一乗院跡の調査

—第383次

はじめに 今回の調査は奈良地方・家庭・簡易裁判所の建て替えにともなう緊急調査で、調査地は興福寺の子院・一乗院の東北隅にあたる。調査面積は63m²、調査期間は2004年12月5日～12月9日であった。基本層序は上層から造成土(旧地裁建設時)、近代整地土(中近世～近現代遺物を含む)、赤色土、黄色粘土、褐色砂礫となっており、黄色粘土より下位は無遺物層(地山)である。近代整地土以下の土層は旧地裁の建設時に大きく削られていたので、調査は同層以下の土層が残存している範囲(約5m²)を対象とした。

検出遺構 調査区内は大きく攪乱を受けていたため、遺構が検出できたのは北壁沿いの狭い範囲に限られた。遺構検出面の標高は約92.9m。まず西端部北壁では、赤色土直下で土師器皿類をきわめて多く含む土坑SK8950を確認した。この土坑の規模・平面プランは攪乱により定

かでない。埋土は2層に細分できるが、両層の間には遺物の接合関係がある。また、調査区東端部では黒色土直下で浅い土坑SK8951～8953を検出しているが、遺物は少なく細片化が進んでいる。このうち、SK8951からは近世瓦(興福寺275型式)が出土している。

出土遺物 ここではSK8950の土器群について述べる。この資料は多量の土師器皿類と少量の瓦器碗からなり、前者には残存率1/2～1/3程度と比較的残りがよい破片も含まれている。土師器皿は淡褐色～明褐色系の色調を呈し、口径の平均10.4cmの小型品(1～4)と、同じく平均15.3cmの大型品(6～9)とに分類できる。大型品の器高は1.8～3.4cmと変異幅が広い。大型・小型の別を問わず、口縁部外面に2段横ナデを施す例が目立つ。口縁端部はやや内傾～直立気味で、玉縁状の口縁をもつ例は皆無である。いわゆる「コースター型」皿(5)を数個体分含む。瓦器碗は1個体分に限られる。いずれも12世紀前半の土器群とみられ、隣接調査地の土坑(第330次・SK8249など)とほぼ同時期の可能性がある。(森川 実)

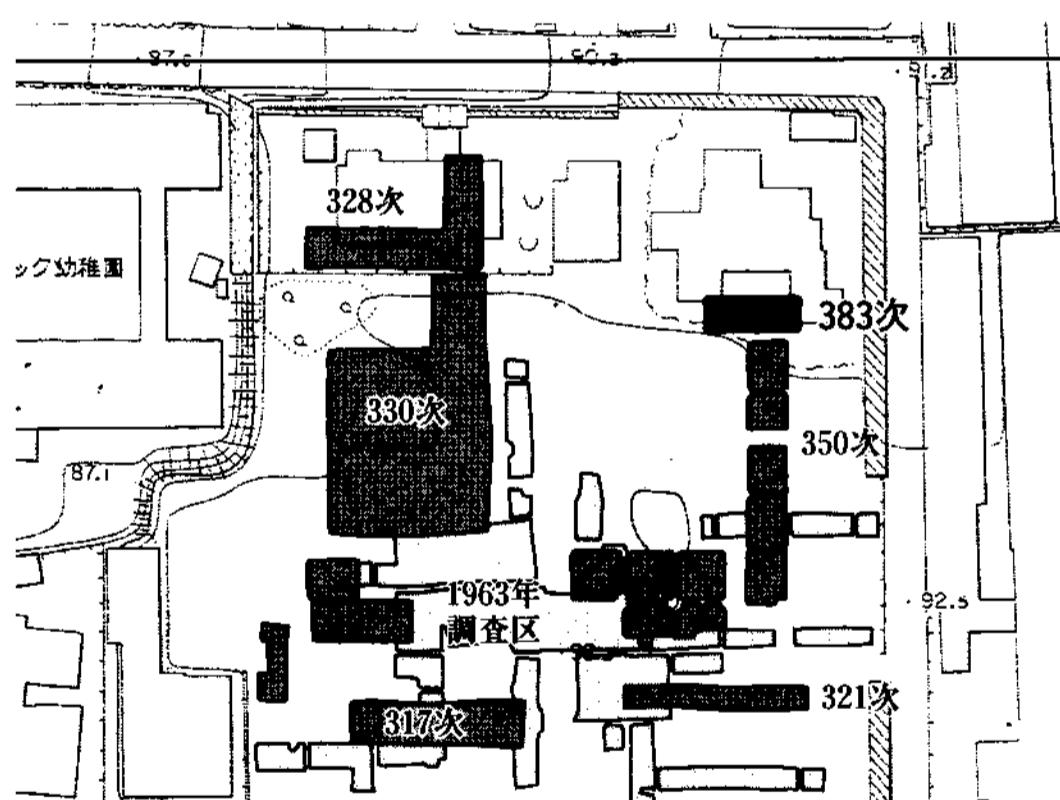


図166 第383次調査位置図 1:1000

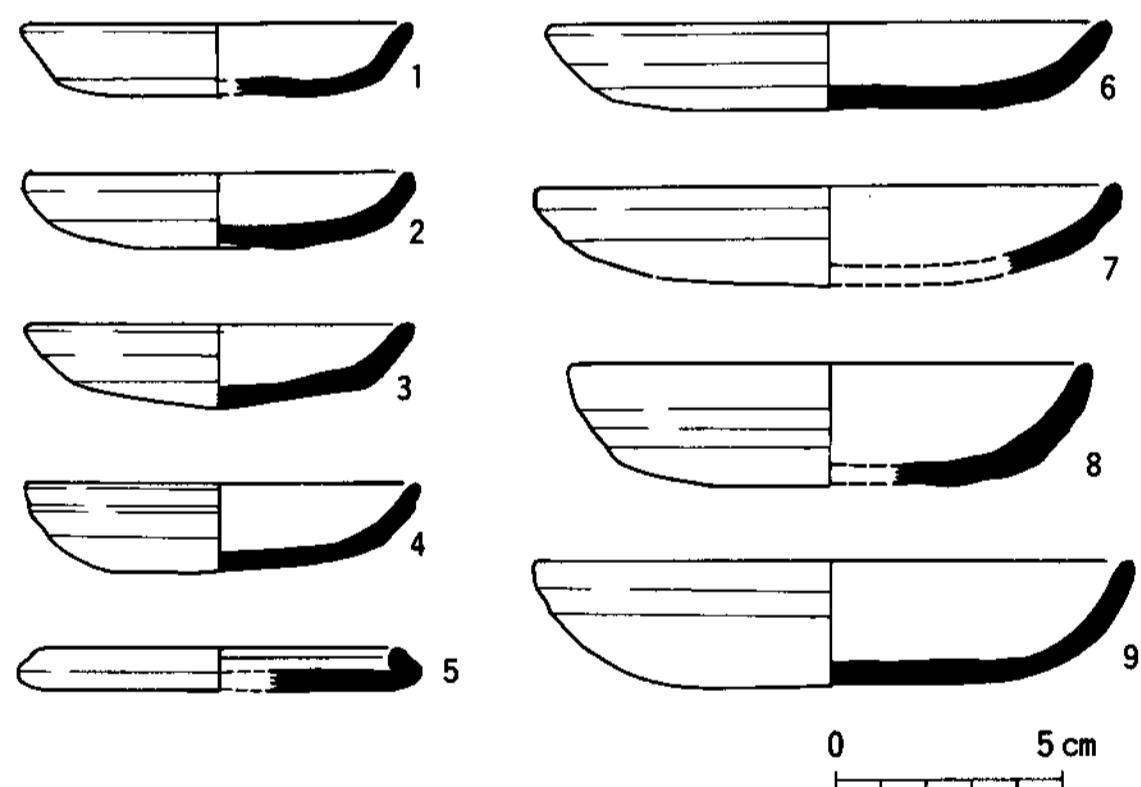


図167 SK8950出土土器

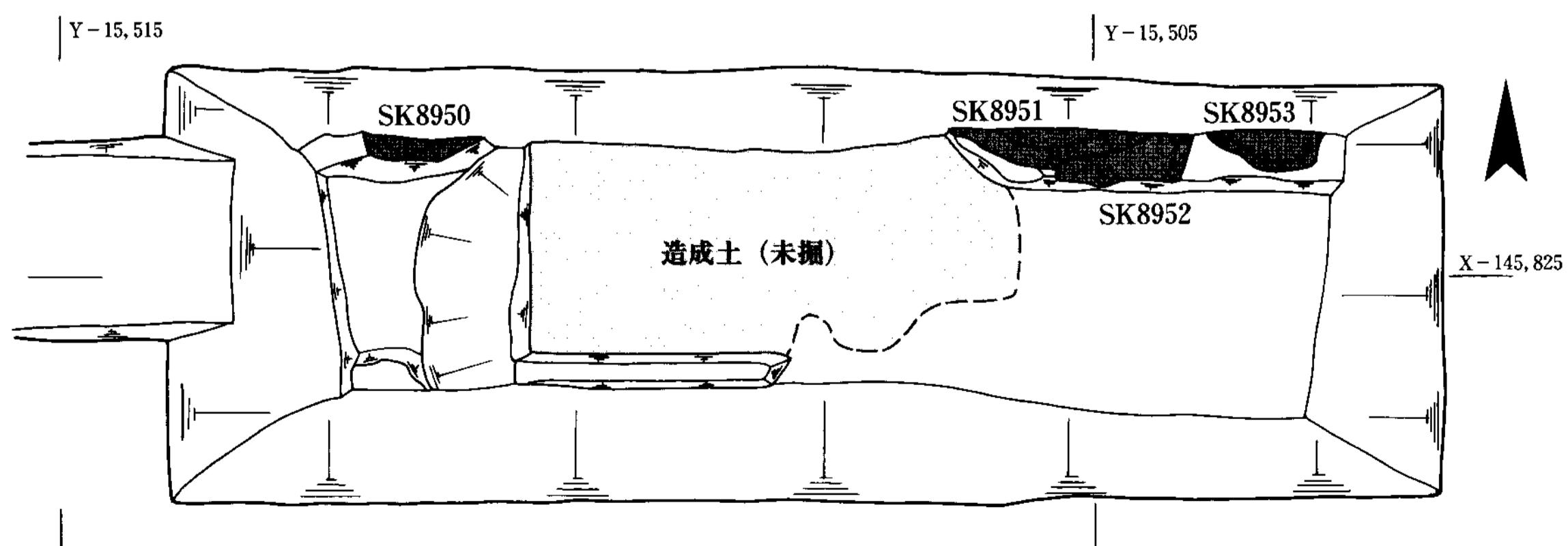


図168 第383次調査遺構平面図 1:100